朝鮮時代の連山県邑治における治所の空間構成に関する復元的考察

- 量案を用いた図面作成を通して -

A RESTORATION STUDY ON THE SPATIAL COMPOSITION
OF CHI-SO ON YEONSAN-HYUN EUP-CHI IN JOSEON DYNASTY PERIOD

- Through constructing a map from Ryang-an, a record of land -

白 孝 珍*, 菊 地 成 朋**

Hyojin BAEK and Shigetomo KIKUCHI

The purpose of this study is to clarify of spatial composition to the case of 'Yeonsan-Hyun Eup-chi' at the end of 19th century, through constructing a map from 'Ryang-an', 1901, a record of land management in real. To sum up the results, Chi-so had only a tiled roof, unlike the surroundings, and gathered together in front of Zousan. The Feng-shui axis from Zousan to Ansan was applied to the axis of Chi-so. This axis of the master plan in Chi-so extended outside and gave a distinctive image to the township of Eup-chi. A main entranceway was on that extended axis. Another type of road, which was different with the roads surrounding the houses in farmlands, made a structure of Eup-chi. And a periodic market was opened next to Eup-chang, a storehouse, on the public lands, because it requires the easy way of accessibility to the other periodic markets in neighbor towns. After Chi-so was built, Eup-chi could take a spatial form of urban shape from road system, a periodic market, two main springs, a public square, and housing clusters.

Keywords : Joseon dynasty period, Eup-chi, Chi-so, Yeonsan-Hyun, Ryan-an, Spatial composition

朝鮮時代, 邑治, 治所, 連山県, 量案, 空間構成

1. はじめに

1-1 研究の背景及び目的

近年, 韓国においても地域固有性が重要視されるようになり, 歴史や文化を中心とした観光開発とともに朝鮮時代の邑治^{注1)}が注目されて来ている。それに従い, 邑治の研究も活発化しており, 空間構造の研究をはじめ, 現在は多様なテーマに拡大しつつある。ただ, 空間構造については, 史料的限界から専ら絵図や地籍原図(1912~1914年)を用いた研究が主流である。しかし, 絵図は風水的観点から作成された図であるため, 実証的空間の把握には限界があり, また, 地籍原図をベースとする研究は, 地目上の国有地に治所^{注2)}の位置を推定することに留まっている。より詳細な復元的研究として政府機関による発掘事業資料を用いたものがあるが, その対象は文化財の邑治に限られている。

邑治は各地方の中心都市であったため, 朝鮮時代の都市研究の主な対象となってきたが, そこでは大邑治^{注3)}中心に語られており, 行政・経済・軍事機能が集積された都市であったという定義が一般的である。そのうえ, 地方の郡・県邑治は, 戦後には農村地域とされる場所に存在する場合が多いため, 都市研究においては注目されてこなかった。殊に物的に目立つ特徴のない無城邑治の研究はさらに数が少ない。

本研究では, 地方の郡・県の無城邑治の事例として連山県邑治を取り上げ, 地方都市としての邑治がどういう空間であったのかを考察する。その際, 邑治研究の分野では注目されてこなかった「量案」^{注4)}を用いて復原図を作成し, 絵図では知りえない邑治の実像の空間復原を試みる。それを通して, 連山県邑治が持つ空間構成を考察し, 邑治としてその周辺部と異なる特性を明らかにする。また, 朝鮮時代, 都市建設の背景にあった儒教思想や風水地理説といったアイデア^{注5)}のもとで, 自然条件にどのように適応しながら邑治を造り出したかを検証する。

この研究においては1901年に作成された『忠清南道連山郡量案』を用い, 治所に関する史料は1872年の絵図と同時期の1871年の『湖西邑誌』を利用した。1871年の『湖西邑誌』に書かれた治所施設の種類や規模は, 1895年に発行された『湖西邑誌』においても同様に記載されており, 1901年の量案上も空間的に大きな変化が見られず, 復原する時代を19世紀末と設定した。絵図・邑誌・量案・地図資料の対比により治所空間を想定し, 確認のため現地においてヒアリング調査と図面採取を実施し, 総合的に解析を行った。

1-2 対象地概要

研究の対象地は韓国の「忠清南道論山市連山面」の中心部「連山里」であり, 19世紀朝鮮時代には「忠清右道公州牧連山県」の「県内面」

* 九州大学大学院人間環境学府 博士後期課程・修士(工学)

** 九州大学大学院人間環境学研究院 教授・工博

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, M.Eng.
Prof., Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, Dr.Eng.

であった。1413 年県監（以下守令）^{注6)} が置かれ、1438 年邑治移建が検討^{注7)} され、1454 年『世宗実録地理志』^{注8)} に記録がある。戸数は 1454 年に 378 戸であったのが、1759 年には 3,488 戸（輿地図書）に増加し、以降 19 世紀末には 3,528 戸（湖西邑誌）と規模を維持した。1910 年に近隣 2 県と行政区画が統合されると、行政機能の多くが論山に集約され、さらに邑治外部への鉄道駅建設で、連山県邑治は県の中心としての機能を低下させていった。戦後、役所が駅前に移動し、旧来の邑治空間から行政機能がなくなったが、2006 年連山市場（絵図上は邑場）の整備を始め、現在は祭りを通した地域活性化の一環として道路の拡張などの都市施設工事が進んでいる。治所一帯には正門であった「連山衙門（絵図上は外三門楼、以下門楼）」が文化財として残っており、邑治内に散在する樹齢数百年の保護樹と門楼前の石碑群が邑治であったことを示している。

1-3 既往研究

地方の邑治研究は 1960 年代に始まり、1990 年代に都市・建築・地理の分野で「邑治」の用語を使った研究が増加して来た。忠清道においては、忠清道の全邑治の空間配置規則を分析した金起徳の研究（2002）⁴⁾ や、洪州牧内の邑治を人口と面積の関係から分析した金會正の研究（2014）⁵⁾、忠清道の全邑治の立地と水体系の関係を分析した姜仁愛の研究（2012）^{注9)}、朝鮮後期の忠清道の場合市網の変遷を分析した李憲昶の研究（1994）⁷⁾ などがある。また、発掘資料に基づいた事例研究としては、大興邑城の SONG-Yunna の研究（2012）⁸⁾ や海美邑城の金會正・李正秀の研究（2012）⁹⁾ などがある。特に海美邑城の研究では古地図での配置と実際の配置とのずれが明らかにされた。また、治所の変容に関しては、舒川郡（3 つの邑治）は日帝時代の役所の建物記録があり、治所の建物をそのまま改築して使ったことを明らかにした BANG-Gabju・朴鍾鉉の研究（1999）¹⁰⁾ がある。忠清道ではないが、量案を用いた研究としては、2014 年世界文化遺産となった南漢山城（京畿道）を対象とし、量案と 1909 年の写真を対比することで治所周辺の空間図を復原した權竣興の研究（2014）¹¹⁾ がある。

このように、昨今は著名な有城邑治において様々な研究領域から

多様な観点の研究が進んでおり、今後は無城邑治及び小邑治まで研究が広がることが期待される。

2. 連山県邑治の絵図分析

2-1 立地・風水形局

現存する絵図数枚のうち、治所の配置が最も詳しく描写された 1872 年のものを検討する（図 1）。絵図は風水地理的空間認識が反映された理念的表現であり^{注10)}、風水地理説では山と水で囲まれた土地を住まいに良い「明堂」と呼び、理想とする山と水の形がある^{注11)}。邑誌によると連山県は「天護山」を「鎮山」^{注12)} とし、絵図では邑治の後方に「天護峰」と表記してある。絵図を風水地理説での用語により検討すると、治所は鎮山の脈を背山（主山）としており、西向きに立地している。鎮山から繋がる南部を囲む山脈が青竜（邑治からみて左側、以下左青竜）となり、鎮山の上部にある山から繋がる山脈が北部を囲む白虎（邑治からみて右側、以下右白虎）となる。邑治の左右は川が流れ、邑治の前で合流する水口があり、治所は水口に向かう「臨水」^{注13)} をとっている。風水地理的要素のうち、案山は邑治の前方にある山であるが、水口が描かれたため、明確には表現されず、重なった山が囲むようになっている。

2-2 施設配置の一般規則性との比較

邑治の施設配置には一定の規則性があるとされる。拙稿「朝鮮時代の郡・県における邑治の施設配置の規則性」¹⁵⁾ で検討したように、大脈絡では「左廟右社・左文右武・天子北坐南向」という原則があり、治所の空間構成及び配置においても規則性が見られる（表 1）。その内容と絵図を比較すると、邑治は南向がふさわしいとされるが西を向いている。一方で①客舎は他の施設群と離れ別空間を形成し、邑治の向きと関わらず南向をして「天子北坐南向」を守っている。②東軒は治所の中心であり、門楼と軸を形成し、左右の施設が向かい合って配置されている。東軒の左に③内衙・④冊房が隣接し、⑤郷庁は東軒と同じ向きで、治所空間の上位に位置する。文科の⑥作庁は東軒の左側、武科の⑦将庁・⑧刑房庁は右側で、左文右武の原則

表 1 邑治の施設配置規則性
（参考文献 15, pp4-5, 表 3・表 4, 修正）

施設	機能	配置規則性
行政	①客舎	観察使の宿所また王の位牌の安置・儀礼の場所 上部位置・南向・紅門-外三門-内三門-客舎の構成・軍事関連施設近隣
	②東軒	守令の執務所 中央上部位置(背山前)・外三門-内三門-東軒の構成
	③内衙	守令家族の家 東軒近隣・最奥位置
	④冊房	守令の秘書の執務所、守令の子供の勉学室 東軒・内衙空間位置
	⑤郷庁	守令を補佐する地方自治機関 東軒と並列・すぐ下部位置
	⑥作庁	各部署の実務を決定 外三門の左右・前位置
	⑦将庁	軍将校の執務所 右側
	⑧刑房庁	罪人の管理 右側
	⑨獄	罪人監禁 円形・邑治の縁側
祭儀・教育	⑩郷校	学校・文廟 左側山脈・邑治内の独立した空間
	⑪社稷壇	土地・穀物の神の祭壇 右側山脈・絶対方位の西
	⑫厲壇	厲魂の祭壇 主山・北側山脈
経済	⑬邑司倉	税米などの保管 交通要地
	⑭邑場	定期市場 交通要地・客舎前・治所正門前・邑倉近隣

図 1 1872 年連山県地方地図
（ソウル大学校奎章閣韓国学研究院所蔵、表 1 の施設番号・方位・道の先行を加筆）

に従う。⑨獄は治所の向かい側に円形に描かれており、⑫厲壇は北側で絶対方位を守る。⑬邑司倉と⑭邑場は隣接して川と道路の近くに位置する。このように連山県邑治の施設は、邑治自体が西向であるのを除いて、かなり規則正しく配置されている。ただし、表 1 にみた規則性は首都の漢陽の配置原則や、各邑誌での方位記録と絵図から分析したものであるため、絵図だけでは規則性に大幅に外れないのは当然であると考えられる。にもかかわらず、連山県は右白虎の上に⑩郷校が、左青竜の上に⑪社稷壇があつて、左廟右社は守られていない。一般的に郷校は校村という独立した村を形成するほど治所と大分離れた施設であり、金起徳によると教育環境上、独立して風水地理的に良い場所に立地する傾向があつたと

される^{注14)}。連山県では郷校の移建の情報はなく、現在も絵図に示された位置に存在する。「左廟」を守るためには、社稷壇がある左青竜の上で、邑治と同じく西向をとれば理想の配置となると考えられる。しかし、左青竜の地勢が弱く、郷校としてふさわしくないため、地形条件の良い右白虎に配置されたと考えられる。

3. 連山県邑治の空間復原

3-1 1901 年量案の復原図作成

絵図が半ば概念を表現したものであるとすれば、実際の空間はどうだったのか。それを考察するにあたって、量案を用いて復原図を作成する。量案とは「経国大典」¹⁶⁾の戸典に基づき、税收のため、20 年毎に調査された土地情報の記録であり、本稿で用いた史料は 1901 年 1・2 月に調査された『忠清南道連山郡量案(以下量案)』である。

図 2 量案に基づく連山県邑治の復原図

土地情報は地番 / 土地の周長 (尺) 及び面積 / 用途 (畑・田・宅地・治所) / 土地形状 (梯・直など) / 土地向 / 所有者・耕作者 / 建物種別 (治所・藁葺・瓦葺) / 建物規模 (間) などが記録されている。特に各土地の四方に面する土地の情報が書いてあり (表 2 の四標), 各土地の連結関係と地籍図との比較から面的に復原することができる。治所がある土地の情報は表 2 であり、絵図と対応している。

復原図作成は次の方法で行った。①地籍原図・旧地籍図・現在の地籍図の地割をベースとし、土地管理台帳の分筆関係で地籍線を整理した^{注15)}。②量案の内容では隣接土地の連結関係を優先し、次に面積比率 (尺 / m²) を考慮した^{注16)}。地籍線の確認ができない土地については、地図上の位置が確実な近隣土地の面積比率を基準として大きさを推定し地籍線を引いた。③量案の記録のうち、矛盾がある情報については、より適切と判断される情報を選択し、可能な限り全ての情報を反映した。

上述の方法で、量案の土地面積により筆を配置し、その後、筆間連結関係を調整、次に地籍図との比較で筆の位置を再調整するプロセスをとった。位置の確実な東軒の隣接土地を基点とし、そこから繋がる宅地を中心に復原図 (図 2) を作成した。宅地群を囲む周辺農地は不正形が多く、連結関係での位置判断には多少無理があり、川に囲まれた宅地密集地域を復原範囲とした。

3-2 主要施設の位置及び配置推定

絵図での配置を元に、量案・地籍原図・1948 年空中写真 (図 3) の対比から主要施設の位置を推定し、ヒアリングと現地調査^{注17)} (表 3) を踏まえて位置を確認し、復原図の調整を行った。

1) 東軒 (図 3 の地 1 東軒, 以下「図 3」は省略) の筆には戦後まで面事務所があり、地籍原図 (図 4) 上では南北路から林地までの敷地である。量案では地 1 が 2 筆あり、南接土地 (玄 25) の四標から内衙 (地 1 内衙) があったことが分かる。四標の長さの平方尺で面積が書いてあるので、東軒と内衙の面積が計算できる。これを地籍原図上の東軒・内衙の面積と比較すれば、東軒の筆は 1.33 (量案 2030 尺 / 地籍原図 1532 m²), 内衙の筆は 1.64 (量案 1200 尺 / 地籍原図 730 m²) であり、内衙筆は分筆されたことがないため、地籍原図の東軒の筆には門楼前の広場の面積が含まれており、面積比率が小さくなっていると考えられる。ここで、東軒の筆を再検討すると、1895 年『湖西邑誌』には門楼埜地の面積が 22 負 (約 2200 m²) と記してあり、復原図の東軒の筆と門楼前の広場を合わせると 22 負近くになるが、絵図では治所を囲み、広場を外の空間として表現しているため、復原図上では広場を別の空間とした。これは表 2 の作庁の

表 2 量案での治所の土地情報

区分	量案の施設名称 (絵図中の名称)								計
	官庁 (客舎)	官舎 (東軒・内衙)	将庁 (将庁)	刑吏庁 (刑房庁)	郡司 (県司)	郷庁 (郷庁)	作庁 (作庁)	郡獄 (獄)	
地番	天字第1	地字第1	地字第2	地字第11	地字第10	天字第85	玄字第23	地字第21	－
箇所	1	2	1	1	1	1	1	1	9
土地形状	梯田	直田	直田	直田	直田	直田	直田	直田	－
土地向	－	南	北	南	南	東	東	南	－
土地規模	3182尺	3230尺	660尺	195尺	289尺	616尺	850尺	480尺	－
建物規模	瓦35間	瓦59間	瓦8間	瓦5間	瓦4間	瓦14間	瓦15間	草1間	141間
四標									－

*量案中の記述による。ただし、施設名称については絵図との対比により () 内に絵図中の名称を併記。

四標において、北部が路になっていることから確認できる。すると、面積比率が1.62（量案2030尺／復原図1251㎡）となり、内衛の比率とおおよそ合致するので東軒の筆に比定した。

2) 客舎（天1）は、他呂治でも客舎が学校に転用されたように、1912年に近代式の小学校として設置された現在の連山小学校の敷地にあったとされる。現在の小学校内の筆のうち、天1は面積比率が1.63（量案3182尺／地籍原図1951㎡）となり、東軒・内衛の比率と合致するため、客舎の筆であると考えられる。

3) 作庁（玄23）は地籍原図ではその一帯が1筆であるため、土地管理台帳の分筆関係により地割を設け、量案と比較し復原図上に表した。ヒアリングでは玄23筆内に公共施設があったとされ、建築物管理台帳上では交換室があることが確認でき、その筆に作庁があったと考えられる。

4) 郷庁（天85）の筆の南半分には日帝時代、「桜木所という日本学校があった」^{注18)}とされる。また、「桜木所の北側に蚕繭の販売所として使った建物があった」^{注19)}と言われ、この一帯に公共機能があったことから郷庁があったと考えられる。

5) 県司（人口・農業管理報告）・将庁の推定位置（地2・3）には現在郵便局と畑があり、「郵便局の位置には3間の教室があった」^{注20)}と言われる。

6) 刑房庁（地11）と公須庁（会計業務：地10）には老人会館・

消防倉庫などが位置しており、日帝時代には警察庁があり、刑房庁の機能が維持されていたと考えられる。

7) 獄（地21）は「面事務所から新作路を渡って裁判所と獄があった」^{注21)}と言われ、その位置推定は不可能であったが、絵図のとおりに円形の筆を検討し、復原図からその位置が確認できた。

8) 邑司倉と邑場（玄9・10）は量案で「倉堡」と記録しており、現在の連山市場の位置である。市場近所では「長い倉庫が2軒並んでいた」^{注22)}と言われ、その位置に邑司倉があったと考えられる。1770年『東国文献備考』の全国場市^{注23)}に連山県の邑場が記載されているが、県の史料のなかでは1872年絵図と1895年『湖西邑誌』に登場する。『湖西邑誌』には「市貫銭」^{注24)}が記録され、1872年以降は邑場が邑治内の主要管理施設となり、そのため官所有の土地のなか論山場へ繋がる道に接していた「倉堡」が提供されたと考えられる。量案では邑司倉の建物記録はないものの、宅地を示す「堡」と書かれている。なお、邑誌での邑司倉規模に比べ、土地が非常に広い。つまり「倉堡」の筆には邑司倉だけではなく、邑場のための空間が設けられていたと考えられる。1911年連山市場設置の際も既存の「場市」の空間が利用されたと考えられる。

3-3 治所規模推定・配置復原

絵図の配置に基づき、施設機能をもとに空間を分類し、各史料からの施設・間数の記録をまとめたのが表4である。「間」は柱の間と言われるが、建物においては4柱の間で形成される空間として使われる^{注25)}。1871年と1895年の『湖西邑誌』では記載施設と間数に変化がなく、絵図の作成時期が2つの『湖西邑誌』の間にあたるため、絵図と『湖西邑誌』記載の施設を基準とし、以下の説明では絵図での名称を使う。

(1) 建物間数の検討・推定

間数の推定については、まず表4の東軒の領域を検討してみる。『湖西邑誌』での総間数は37間であり、絵図にある外三門楼を6間（遺構：長3×横2）、官奴庁と対称に位置する使令庁を同じく8間と仮定し、足し合わせると51間となるが、間数不明の冊房、1871年以降の有無が確実ではない楼上庫（2間）を考慮すると量案での59間と総間数の対比ができる。つまり、絵図での主な施設の空間は日帝時代にも維持されたので、1901年量案の時点でも大部分の施設が存在したと考えられる。量案は邑誌より土地情報の正確性が高いものであるため、量案を総間数の基準とし、対比を行った。

上述の東軒の領域から、外三門楼を遺構の6間とすれば、楼上庫の有無により冊房は6～8間と推定できる。

次に、客舎の領域を検討すると、『與地図書』には位版庫（位牌の保管）があり、儀礼を行う客舎がある限り、位版庫も存在したと考えられるが、19世紀末での有無は明らかではない。訓練庁（3間）・軍官庁（4間）・軍器庫（3間）は軍施設であり、絵図では軍器庫が非常に大きく表現されていることや、軍施設が客舎周辺に位置する配置の規則性（表1の①）から、絵図に描かれた軍器庫はこれら3つの施設をまとめて描いたものであると考えられる。庫直は総間数35間のうち、位版庫が同時に存在した場合は8間、存在しなかった場合は11間であったと推定できる。

その他の施設を検討すると、量案の時点では公須庁がなくなり、郷庁と作庁の規模が拡大されたことが分かる。絵図での公須庁は量案では郡司とされ、建物用途の変更があったと考えられる。つまり、

図3 1948年空中写真
(国土地理院、表3の番号入れ)

図4 1914年地籍原図
(国家記録院所蔵の地籍原図より作成)

表3 主要施設の現地調査・ヒアリング

区分	絵図での施設	図3の番号	現在用途	内容 (1930年代～戦直後の用途)
1)	外三門楼	0	連山衙門	道文化財
	東軒	1	道路・空き地	(面事務所)
	内衛	2	道路・空家	建物は冊房の位置と推定。(内衛は畑、守令の家は門楼前に新築)
	官奴庁	3	空工場	(蚕繭工場・臨時教室)
2)	客舎一帯	4	連山初等学校	旧客舎地(連山小学校)、1912年開校、1927年増築決定
		5	銀杏	300年以上の保護樹(後ろに3間倉庫)
		6	遊び場	(井戸)
		7	幼稚園	(学校の執務所)
		8	学校門と木	(門楼のように、門のすぐ後面に木があったが、現在は移動)
3)	作庁	9	住宅	(郵便局)
4)	郷庁	10	塾	(倉庫・日本学校(桜木所)と井)
5)	県司・将庁	11	郵便局	井と右の2建物までは郵便局の土地(左から井戸・臨時教室・塔と畑)
6)	刑房庁	12	老人会館	(警察庁・庁長の家)
	公須庁	13	消防倉庫	
7)	獄	14	食堂	(裁判所・監獄、戦後病院)
8)	邑司倉	15	塾	旧農協共同組合(倉庫2軒)
	邑場	16	連山市場	1911年現在位置に常設市場設置

*内容部分の()は住民からのヒアリングによる

量案の郡司（4間）が絵図での公須庁の位置にあたるため、公須庁は4間であったと推定できる。次に、絵図での県司は量案では将庁に統合もしくは解体されたものと考えられる。解体されていた場合の将庁は量案のように8間となり、統合されていた場合は、各3～5間内で分けるのが適切と考えられる^{注26)}。加えて、「元学校の教室が足りなくて郵便局にあった3間の建物を小教室で使った」^{注27)}との住民の証言から県司の建物は維持されたと考えられ、県司を3間、将庁を5間と推定する。

邑誌で規模不明の建物については量案での間数から算出したが、郷庁と作庁については邑誌に記録があるため、これを採用する。まず、作庁は邑誌では8間、量案では15間とされ、絵図の作庁の空間にナン護庁があることで、ナン護庁が7間であったと推定される。しかし、郷庁は他の付属施設が確認できず、邑誌での6間とする。刑房庁は量案以外に間数の記録が確認できないため、量案の通り5間、獄は1間とする。獄の1間は獄舎ではなく管理所であると考えられる^{注28)}。

邑司倉については、邑誌には他施設と区分して記録されるほど重要な施設であるが、『輿地図書』以降は間数の記録や変更事項の記録がない。1895年半ばまでは連山県の人口変動や税制政策の大変革がなかったことを勘案すると^{注29)}、『輿地図書』での規模が維持されたと考えられる。また、3章の2に説明したように、ヒアリングにおける2軒の倉庫が、東庫・西庫であると考えられる。

(2) 治所配置推定

上述のように間数を調整した施設（表5）を図1の絵図にあてはめた配置が図5である。間数は推定値の最小をとり、間の大きさは門楼（実測：縦2.20m、幅－左右間2.50m・中間3.05m）を基準とし、

19世紀末の有無が確実でない位版庫と楼上庫は除いた。

以上までの情報を統合し、図5の施設配置を図3の地割にのせると図6が得られる。復原図の地割と治所の壁が必ず合致したとは言えず、図6では絵図と空中写真の区画を考慮して領域を区分し、移植されている保護樹と古木は元の位置に復原した。建物については客舎・東軒以外の遺構調査や復原研究は僅かであるため、現存建物と空中写真での配置、また他邑治の絵図を参考にした。東軒は空中写真で門楼と同じ入母屋屋根が確認できる（図3の1）。

絵図に基づいた配置（図5）と復原図上に推定した配置（図6）の間にはかなり違いが見られる。絵図では直角の矩形に描かれた治所は、実際には矩形地割は見られず、客舎と邑司倉が東軒施設群と離れていることが目立つ。邑治の空間は、北は川に、南西は水路に、南東は山に囲まれており、客舎と邑司倉は東西に平地の開けた空間に位置する。これは中央と直接関係する施設^{注30)}であるため外部との近接性がよい立地をとったと考えられる。

4. 都市空間としての連山県邑治の特性

ここでは、3章で復原した空間と各種文献資料をもとに、連山県邑治の空間特性を考察する。朝鮮の開国以来、次第に各地方の邑治が整備されたように、本研究の連山県邑治も1438年～1454年の間に形成されたと考えられる。以降、治所と関わる地名を持つ集落ができ、県の中心部としての骨格を備えるようになったと考えられる。

4-1 空間骨格と象徴要素（道路・入口・軸）

邑治の道は周辺部と異なる骨格としての役割を持っていたと考えられる。量案では邑治の道を「路」と表記しており、宅地群を囲む農地での畦道は特に記録されていない。邑治内の道路に関して、『碯

表4 治所施設の区分と規模

区分	量案(1901)		絵図(1872)		湖西邑誌(1871・1895)		輿地図書(18世紀中半)	
	施設	間数	施設	間数	施設	間数	施設	間数
客舎の領域	官庁	35	客舎		客舎	－	客舎	8
			内三門				中門	3
			外三門				外門	3
							位版庫	3
			軍器庫		軍器庫	3	軍器	3
					火薬庫(今無)	1	火薬庫	1
					軍官庁	4		
					訓練庁	3		
			庫直					
東軒の領域	官舎	59	東軒		東軒	8	東軒	8
			内三門		中門	3	中門	3
			外三門楼				外門	3
			冊房					
			内衙		内衙	10		
			行廊		翼廊	5		
			官奴庁		官奴庁	8		
			使令庁					
					官庁	3	官庁	12
							楼上庫	2
その他	郷庁	14	郷庁		郷庁	6		
	作庁	15	作庁		作庁	8		
			ナン護庁					
	郡司	4	県司					
	将庁	8	将庁					
	刑吏庁	5	刑房庁					
	郡獄	1	獄					
邑司倉	倉堡		邑司倉		邑倉		東庫	12
							西庫	12
							坐起庁	3
							大門	1

表5 19世紀末推定施設

区分	19世紀末推定施設・規模	
客舎の領域	客舎	8
	内三門	3
	外三門	3
	(位版庫)	(3)
	軍官庁	4
	訓練庁	3
	軍器庫	3
	庫直	8～11
	東軒	8
	内三門	3
東軒の領域	外三門楼	6
	冊房	6～8
	官庁	3
	内衙	10
	行廊	5
	官奴庁	8
その他	使令庁	8
	(楼上庫)	(2)
	郷庁	6
	作庁	8
	ナン護庁	7
	県司	3
	公須庁	4
	将庁	5
	刑房庁	5
	獄	1
邑司倉	東庫	12
	西庫	12
	坐起庁	3
	大門	1

*()は輿地図書にのみ記載あり

図5 絵図に当てはめた19世紀末治所の推定配置

図6 復原図上の19世紀末治所の推定配置

溪隨録』^{注31)} (1670年)では大路(18歩)・中路(9歩)・小路(6歩)に区分し、順次整備するよう勧めている。つまり、量案での「路」は邑治内道路として、記録されていない畦道と異なるものであるといえる。

連山県邑治内の「路」は大きく見て「南北路」、客舎から邑司倉までの「東西路」があり(図7)、これらの道は泉(南北路の脇)の北の部分を除き、日帝時代に拡大・連結された「新作路」と呼ばれる。現在は東西路の代わりに、地籍原図上の鉄道が道路となって東西連結の役割を担い、南北路と共にバスが通っている。その他の「路」は「手車1つが通る程度の小道」^{注32)}であり、「日帝時代の民家は特に塀がなく、民家の間を自由に通った」^{注33)}という。

有城邑治には城壁に複数設けられた門のなかで正門としての機能を備えた門があったように^{注34)}、無城邑治にも治所の正門にあたる入口としての道があったと考えられる。主に無城邑治の絵図では治所の正門(門楼)へ接近する道に紅門^{注35)}があり、治所の入口として表現されている。連山県邑治において、紅門は史料やヒアリングに見られず、また、漢陽の宮殿の前に門前路(T字路)があるように、連山県邑治も門楼前に門前路がある。従って、漢陽から繋がる大路^{注36)}がある西側から邑治に入る連結路としての南北路・東西路・門前路を検討していく。

連山県の西北には上位行政区域である公州牧の邑治があり、量案

では邑司倉の西部に「旧將臺」という地名が記録されている。忠清道觀察使が地方を巡る際、地方守令などが將臺で觀察使を迎えたと言われることから^{注37)}、邑治の入口を西側に推定した。図1では地形の誇張により道路がずれているが、西北には公州界、西には恩津界に至ると書いてある。図1と他の古地図類^{注38)}を地形図に対比して周辺道路を推定したのが図8である。

南北路は川を渡って北の郷校へ繋がり、さらに行くと北部の公州牧に繋がる大路と合流する。東西路の西部は論山場への道に繋がり、門前路から西へ伸びる道は連山の有力両班の村である高井里を経て恩津県邑治に達する。南北路の北部は「門楼前のような道ではなく、(邑治北部に隣接する)村の進入路」^{注39)}であり、「川の渡る場所は今の橋ではなく、より上流部であった」^{注40)}とのことから、入口というよりは郷校がある川北部の村に繋がる道であると考えられる。次に東西路は邑司倉からの税米を論山場近くの水路の倉庫まで運搬する利便性^{注41)}、觀察使の宿舎である客舎の交通利便性が要求される道である。一方、連山県を訪問した觀察使は公州牧から魯城県-恩津県に寄ってから連山県に入ったという記録があり^{注42)}、恩津県邑治に繋がる門前路に入ったと考えられる。つまり、邑治内での機能面から考えると、南北路は郷校に通う道、東西路は税米運搬の道、門前路は官の公式的な入口として使われたと解釈できる。

なお、門前路は主入口としてその象徴性が伺える。治所は図9の

ように主山-東軒-門楼-案山が軸となっており、その軸上に門前路がある。門前路から西へ伸びる道は「しよいこを背負って通った畦より広い道」^{注43)}であり、水路との交点には樹木があつて、他の道とは異なる景観が造られている(図9)。また、門楼からは門前の家並みの端の様子まで望むことができる。連山の地名由来には邑治内で唯一「街」と呼ばれる道があり、門楼前の「三門街」があつた^{注44)}。漢陽のように、門楼前に町が形成されたかは確認できないが、樹木、三門街、治所配置軸の関係から、門前路は象徴性のある空間であつたと考えられる。また、治所は権力を表現するため、華美にならない程度に威厳のある建物を建設し^{注45)}、連山県の復原図範囲内では治所(獄を除く)の建物だけが瓦葺であつた。瓦葺の建物が軸中心に向き合って群集しており、治所の空間軸を外に延長することで、治

図7 19世紀末の推定空間構成

図8 大路と近隣への推定路
(1924年1:5万地形図、筆者加筆)

図9 治所配置の軸(写真)と門前路一帯の集落図

図10 外三門楼(連山衙門)

4-2 公共空間（広場・市場・泉）

一般的に朝鮮時代の市場、即ち、「場市」は常設店舗よりは、「場日」^{注47)}という決まった日に行商が集まって商売をした場所であった。連山県の邑場は1911年に連山場となり、当時の醸造施設の一部と「場屋」^{注48)}が残っている。また、現在は整備された市場（日帝時代の常設市場）と伝統行事を行う広場としての駐車場（日帝時代の牛市場）がある。日帝時代には「行商にご飯を売る店が3ヶ所ぐらいあって、店はほぼなかった」^{注49)}とのことで、図3の空中写真から分かるように常設店舗は道近くにあり、朝鮮時代の「場市」の様子が残っていたと考えられる。「場市」は1770年『東国文献備考』に場日の記録があるように、1930年『論山郡誌』は勿論、現在も運営されているシステムである。現在の場日には車で移動する行商が歩道で販売をし、店舗があっても南北路沿いに商品を持ってきて販売するなど、南北路と場屋がある裏道が賑やかである（図11）。この様子は人が比較的集中しない整備された市場や、日帝時代の商店街であった東西路に閉鎖した店舗が多い状況に比べると、商圈縮小と接近性の理由もあるとはいえ、場所が変わっても過去の慣習が続いているとも言える。

南北路沿いの店舗

歩道の行商

店舗外への持ち販売

農協組合

バス停

南北路

新東横路 (地籍図上の鉄道)

0 10 20m

裏道の場屋

整備された市場

東西路の商店街

図 11 南北路付近の連山市場平面図

5 おわりに

絵図で治所だけを拡大して描いたのは、作成した連山県の役所の空間認識が風水地理的かつ治所中心的であり、民家の宅地に関しては量案整備を通して課税のための情報を把握するのみで、行政にとっては治所周辺集落の都市空間的重要性は高くなかったからであると考えられる。

— 663 —

人が集中する邑場，周辺のミチとは異なる「路」，泉などの給水システムを備えた連山県邑治は都市的様相を持つ空間であり，これは4章で述べたように，1438年以降の治所の立地があったからこそ形成されたと考えられる。

量案を用いた復原作業により，連山県邑治について絵図のみでは知りえなかった実際の空間構成が明らかになった。今後は，量案から浮かび上がった治所周辺集落の空間特性の解明を課題としたい。

参考文献

- 1) 韓国古文書学会：朝鮮時代生活史，歴史批評社，1996
- 2) 呉人澤：朝鮮後期の量案と土地文書，釜大史学第20号，pp.151-185，1996
- 3) 国史編纂委員会：朝鮮王朝実録，漢・韓対照，sillok.history.go.kr，2014.12.20
- 4) 金起徳：朝鮮時代忠清道官衙建築の配置体系，清州大学校博士学位論文，2002
- 5) 金會正：朝鮮後期洪州牧邑治の都市構成特性に関する研究，忠南大学校博士学位論文，2014
- 6) 姜仁愛：朝鮮時代忠清地方の邑治空間の水体系に関する研究，京畿大学校博士学位論文，2012
- 7) 李憲昶：朝鮮後期忠清道地方の場市網とその変動，経済史学会経済史学 Vol.18 No.1，pp.1-56，1994
- 8) SONG・Yunna：朝鮮時代大興邑城の配置及び建築計画特性，牧園大学校修士学位論文，2012
- 9) 金會正，李正秀：海美邑城客舎の位置及び建築構成研究，建築歴史研究第21巻3号，2012
- 10) BANG-Gapju，朴鍾鉉：舒川地域の邑集落の変貌，公州大学校地域開発研究所，地域開発研究論叢 Vol.8 No.1，pp.74-119，2000
- 11) 權俊興：1900年代南漢山城の集落の配置の復原に関する研究，明知大学校修士学位論文，2014
- 12) 高東煥：朝鮮時代ソウル都市史，太学社，2007
- 13) 村山智順：朝鮮の風水，朝鮮總督府，1931
- 14) 李翼成：1751年李重煥の擇里志，韓国語翻訳，乙酉文化社，2012.3
- 15) 白孝珍，菊地成朋：朝鮮時代の郡・県における邑治の施設配置の規則性，九州大学大学院人間環境学研究院，都市・建築学研究第29号，pp.1-8，2016.1
- 16) 韓国法制研究院：経国大典，法制處譯註，1993，漢字原本閲覧 kyu.janggak.snu.ac.kr，2016.4.5
- 17) 朴興秀：李朝尺度に関する研究，大東文化研究号4集，pp.199-274，1967
- 18) 成鎮郁：韓屋の間の体系研究，ソウル市立大学校博士学位論文，2010
- 19) 李在煥：朝鮮時代邑治の空間構成に関する研究－慶尚北道地域を対象として，大邱大学校博士学位論文，2007
- 20) 韓国歴史研究会朝鮮時期社会史研究班：朝鮮はいかに地方を支配しただろう，アカーネット，2000.4
- 21) 管野修一：朝鮮初期賑恤穀の運送問題－朝鮮王朝の国家的再分配機能に関する考察，古文書研究第22巻，pp.193-222，2003
- 22) 柳馨遠：礪溪隨錄（1670年），漢・韓対照デンシブック，ヌリメディア，2001.8
- 23) 崔潤晤：礪溪柳馨遠の閭里頃と體国經野－里と都市・国家改革論を中心として，朝鮮時代史学会，朝鮮時代史学報第67巻，pp.283-328，2013
- 24) 金炳周，西垣安比古：朝鮮の大路と邑治の連結関係に関する研究－朴定陽の曝曬日記（1871年）を通して，日本建築学会計画系論文集75巻648号，pp.487-493，2010.2
- 25) 余尚珍：18世紀忠清監司の監督處及び道内邑治施設の利用－金龜・巡歴・行礼を中心に，韓国産学技術学会論文誌 Vol.9 No.1，pp.143-153，2008
- 26) 李濟：忠清監營日記，ソウル大学校奎章閣韓国学研究院所蔵，1704.5-1705.3
- 27) 論山文化院：論山地域の地名由来，1994

注

- 注1) 邑治とは朝鮮時代の行政単位の府・牧・郡・県の役所が置かれた地域を示し，広くは軍事目的の城の場合も邑治と呼ばれる。
- 注2) 本稿では邑治と区別して，邑治内に位置した東軒を中心とする行政建物群を治所とする。

- 注3) 上位行政区域である府・牧の邑治や，郡・県邑治の中でも軍事拠点として築城された大規模の有城邑治を大邑治と呼ぶ。
- 注4) 国家の徴税のために作られた土地台帳であり（参考文献1 p.140），1601年からは道別に1720年代以降は郡・県別に作成・管理された（参考文献2 p.152）。
- 注5) 漢陽都城建設の際は，「背山臨水」の風水地理的立地を取り，『周礼』の「考工記」の「左祖右社，面朝后市」を採用したとされる（参考文献12 p.67）。本稿では邑治研究でより一般的に用いられる「左廟右社」の語を使う。全国邑治が整備された朝鮮初期の世宗（1418-1450年）は中国の風水地理書を収集・研究し，朝鮮の行政に導入し，邑治は漢陽都城の構成に従って形成された。金起徳は『周礼』を儒教思想体系，朝鮮の風水地理説を韓国の伝統地理体系であるとする（参考文献4 pp.216）。
- 注6) 県監とは県の役人の最高職位である。守令とは各地に派遣された最高位役人の通称であり，本稿では連山県監を守令と呼ぶ。
- 注7) 朝鮮王朝実録，世宗81巻，1438年5月16日記事「今連山県遷于開泰寺。夫開泰，不宜立県之地，願待豐年移于他地」。
- 注8) 参考文献3の世宗実録に収録され，1454年に独立して編纂された。
- 注9) 参考文献6では地籍原図の分析により連山県邑治に排水路があるという。
- 注10) 参考文献12 pp.397-399。
- 注11) 明堂の後に主山，前に客山（案山），左に青龍，右に白虎という山に囲まれており，前方には水口がある。朝鮮の風水地理の空間概念は鎮山の位置と向きにより説明される（参考文献13 pp.15-17，52）。
- 注12) 鎮山は，神は上方に居ますと云う観念があり，朝鮮の都邑は鎮山の下に集団陽基をなしたという（参考文献13 pp.748-749）。
- 注13) 朝鮮王朝実録では，邑治においては水が最重要であるとし，参考文献14のト居総論には立地選定時に最初に考慮することは「臨水」であるという。
- 注14) 参考文献4 p.135。
- 注15) 地籍原図は日帝時代に作られた最初地籍図である。量案と異なる大筆が認められるものの，地籍原図を元に韓国政府が改訂した地籍図では量案と相応する筆境界に改められるなど，地籍原図では量案中のいくつかの筆を合筆して表現したと考えられる。
- 注16) 量案は甲戌量田尺を使用する。朝鮮末期推定の『度支準折』では量田1尺は周尺の4.775尺と記録されており，19世紀末の周尺は20.48cmであったという（参考文献17）。本研究の量案の尺は治所施設の筆以外は換算面積との差があるので，その代わりに面積比率を使った。
- 注17) 2013年5月事前踏査，2013年10月ヒアリング調査，2014年3月事前調査・ヒアリング調査，2014年9月実測調査・ヒアリング調査を行った。調査参加者は，菊地成朋，内田貴久，白孝珍，橋田竜兵，野口雄太，青木美音，佐々木悠理，山田達郎である。
- 注18) J氏：80代，C氏：84歳（以下J氏）。
- 注19) S氏：74歳，前里長，スーパー運営（以下S氏）。
- 注20) R氏：72歳，前婦人会長（以下R氏）。
- 注21) M1氏：87歳（以下M1氏）。
- 注22) D氏：80代，旧醸造場で食堂運営。
- 注23) 場市は常設でなく，5日に1回の頻度で開催される物を交換する市場である。朝鮮時代の漢陽では市塵という計画町があり，地方に計画した「店」と異なる，自然に発生した市場である。それを，「場門」「場市」と呼び，本稿では「場市」の用語を使う。一般的な用語としての市場は1910年に降に常設となったものを示す。
- 注24) 場市にかけられる税金である。1871年の『湖西邑誌』では「新增場市」といった新設場市の記録があるが，邑場は登録されず，1896年の邑誌で県内面を「県内場が開く」と説明している。
- 注25) 参考文献18 p.7。また，1間は両班の家では2.4m内外，民家では1.8m内外であったという（p.15）。
- 注26) 参考文献4のpp.170-171では各施設の間数を調査し，県司は3～8間，将庁は4～8間程度であったとしている。
- 注27) R氏。
- 注28) 参考文献4 p.190では，獄は男女分離の施設と管理室があるとされ，参考文献19では管理室は隣接の土地にあったと推定している。
- 注29) 邑司倉は税米・軍米・替米などを保管する施設であるが，19世紀末に一部税收が米から金へと転換している。しかし，1884～1896年の農民運動などによる社会変動と制度改革はあったが（参考文献20 pp.309-362，賦課政策の変化・19世紀後半国家の地方支配），税米の量が激減するほどの政策の変化はなく，邑司倉の規模の変化は軽微であったと考えられる。
- 注30) 邑司倉の管理権は守令にあるが，行政体系上は中央政府の下にあり，運送や税米量などは中央の指示で行われた（参考文献21 pp.198-200）。

客舎は觀察使の宿であるという機能の面から中央と関係する施設である。

注 31) 参考文献 22 の道路と橋の節では、道路の幅と共に道路に沿って排水のための水路を造るのがよいとしている。『礪溪隨錄』は国家運営上、行政が使った国家改革論である（参考文献 23 pp. 287-288）。

注 32) S 氏。

注 33) R 氏。

注 34) 参考文献 24 では漢陽において、近隣施設へ公式的に訪れる際、近い門ではなく南門が正門として利用されているとし、地方では漢陽がある（王が来る道）方向の門を正門としたとされる。

注 35) 紅門は郷校・書堂には必ずあり、絵図では儀礼の場所でもある客舎にもよく見られる。下馬碑が共に立てられることが多い。

注 36) 大路は官路とも呼ばれる、漢陽から各道を連結する道路であり、「経国大典」にその区分と基準が、『道路考（1770 年）』に詳細ルートがある。

注 37) 参考文献 25 pp. 147-149。將臺は監視や軍指揮のための背の高い建物である。

注 38) ソウル大学校奎閣韓国学研究院所蔵の 1677 年の地乗、1750 年代初の海東地図、1789 ～ 1795 年頃の輿地図、1800 年前半の廣輿図、1872 年の地方地図（図 1）と全国の 1861 年の大東輿地図を対比した。注 39) S 氏。

注 40) S 氏。

注 41) 『輿地圖書』では邑治から西側 30 里の距離にある河倉に税米を集めて、首都に運搬するとされる。18 世紀の恩津県地図（方案式）から川の近所に「連山倉」が確認できる。

注 42) 参考文献 26, 「29 日晴尼山郷校謁 聖後恩津中火連山宿所」。

注 43) S 氏。

注 44) 参考文献 27 p. 349。

注 45) 朝鮮王朝実録では朝鮮初期の 1400 年代に邑治の移建などの記事が多く見られ、世宗 70 卷、1435 年 11 月 23 日の記事では治所の再建の一つの理由として權威の象徴が挙げられ、その意見に同義している。

注 46) J 氏。

注 47) 場市が立つ日のこと。5 日ごとに立つ「五日市」が一般的であり、周辺地域の場市の場日は重ならないように設定されていた。朝鮮時代には月 2 回であったのが日帝時代には 5 日ごとにした。

注 48) 場屋は市場での常設店舗として建築されたもので、建築物管理台帳では 2 軒が残っていることが確認できる。

注 49) M1 氏。

注 50) M2 氏：50 代、市場内の食堂運営。

注 51) S 氏。

注 52) 参考文献 27 p. 349。

A RESTORATION STUDY ON THE SPATIAL COMPOSITION OF CHI-SO ON YEONSAN-HYUN EUP-CHI IN JOSEON DYNASTY PERIOD

– Through constructing a map from Ryang-an, a record of land –

Hyojin BAEK and Shigetomo KIKUCHI***

* Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, M.Eng.

** Prof., Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, Dr.Eng.

The government in the early of Joseon dynasty, Korea built ‘Chi-so’, which was an administrative institute to the each of every administrative district (Boo-Mock-Gun-Hyun: Upper level to lower one) for governing and the place with Chi-so was called as ‘Eup-chi’. The ideal place for Eup-chi was selected by the Feng-Shui theory, and the master plan to arrange Chi-so was applied by the principle of arranging in the capital area, ‘Han-yang’. The studies of the Eup-chi are the main parts of studies for understanding of the Joseon cities. Those are, however, mostly focused on a major city, a castle city, or the cities with ruins preserved well.

The purpose of this study is to clearly of spatial composition to the case of ‘Yeonsan-Hyun Eup-chi’ at the end of 19th century as focusing on its regional township without castles in the suburban districts of ‘Gun-Hyun’.

There is the only map with the arrangements of Chi-so, which illustrates formally in large with Feng-shui elements. On the other hand, there is ‘Ryang-an’, a record of land management in real, and a map in this study is constructed from the one in 1901. To understand the real land uses, it is examined by comparing with the Feng-Shui-map, 1872, the Land-Registration-map, 1914, and the photomap, 1948 and by contrasting with a town chronicles. Moreover, the study uses field investigation with listening local voices to restore master plan of the Chi-so.

To sum up the results, it shows as follows:

First, Yeonsan-Hyun Eup-chi was facing west in spite of the belief to face south in Feng-Shui theory on the geographic conditions and its school, Hyanggyo(a government-run provincial school), was located at the right side among the Chi-so, which is the opposite in the building principle of the capital area. Storehouses, called ‘Eup-chang’, and official guesthouses, called ‘Geak-sa’, were apart from Chi-so, a local administration, and they were in good places to connect with the central administrations of Han-yang.

Second, the Chi-so had only a tiled roof, unlike the surroundings, and gathered together in front of Zousan(the major symbolic mountain on the back side of Eup-chi, as guarding a town). The Feng-shui axis from Zousan to Ansan (this mountain closes the space in front of the Eup-chi to contain energy from main mountain) was applied to the axis of Chi-so. This axis of the master plan in Chi-so extended outside and gave a distinctive image to the township of Eup-chi.

Third, a main entrance such as a gateway of a castellated Eup-chi was on the entranceway of the symbolic axis(above written), on which a provincial governor approached to Yeonsan-Hyun Eup-chi.

Fourth, private houses were in cluster around the Chi-so, without illustrated on the Feng-shui map. Another type of road, which was different with the roads surrounding the houses in farmlands, made a structure of Eup-chi. This road was three-way intersection, following the Feng-shui theory to avoid as an X-road.

Lastly, a periodic market was opened next to Eup-chang, a storehouse, on the public lands, because it requires the easy way of accessibility to the other periodic markets in neighbor towns.

Therefore, Yeonsan-Hyun Eup-chi has the central level of ‘Hyun’ township from building Chi-so under the national governing ideology. In doing so gradually, it can take a spatial form of urban shape from housing clusters, road system, and a periodic market to barter. Also, two main springs for water supply and a public square in front of a gatehouse were acting for public space.

(2016年7月8日原稿受理, 2016年11月22日採用決定)